

Title	関東地方における岩版・土版の文様
Sub Title	Motifs on doban (cay plauques) and ganban (stone plauques) in Kanto (関東) District
Author	稲野, 彰子(Inano, Akiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1982
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.52, No.2 (1982. 9) ,p.159(323)- 170(334)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820900-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

関東地方における岩版・土版の文様

稲野 彰子

はじめに

岩版・土版は材質が泥岩ないしは粘土からなる版状の遺物である。破損した状態で出土することが多く、また赤色塗彩を施したものがあることから、宗教的な遺物の一種と考えられている⁽¹⁾。縄文時代晩期に発達し、その分布は大きくみて東北地方と関東地方の二地域を中心とする。

本稿はこのうち関東地方の岩版・土版をとりあげて、その文様のあり方を考察しようとするものである。

本題に移る前に、岩版・土版に関してこれまでに行われた研究の中から、主だったものを紹介しておく。

1 研究史

岩版・土版の研究は主に用途論的研究が盛んであった時期と、それ以後の分類および編年に主眼がおかれた時期とに二分される。

① 用途論的研究

関東地方における岩版・土版の文様

岩版・土版の研究はE・S・モースによる大森貝塚の発掘から始まる(モース 一八七九)。モースは同貝塚から出土した五点の土版に対して詳細な観察を行い、ア、級位の称号 イ、投環戯の道具 ウ、護符などの用途を推測した。中でも岩版・土版を護符とする説は、これまでにそういった用途を示すような出土例はなにもない、今日最も一般的な見解となっている。

一方、大野延太郎は岩版・土版と土偶とが文様の上で密接に関係していることに注目して、岩版・土版は土偶から派生・退化したものであること、またその用途も土偶に近いものであったろうことを主張した(大野 一八九七・一八九八・一九〇一)。岩版・土版の発生に関するこのような見解は後述する天羽利夫の研究によって否定されるが、岩版・土版に施された文様と他の遺物の文様とを比較検討した点は評価されよう。

② 分類および編年的研究

先に述べた用途論とは別に、岩版・土版の集成・分類・編年および分布などの基礎的な研究に着手したのが、池上啓介(池上 一九三五)、江坂輝弥(江坂 一九六〇)、天羽利夫(天羽 一九

六五)の諸氏である。それらの成果は天羽の論文「亀ヶ岡文化における土版・岩版の研究」の中に集約されたものをみることができ、これを要約するとおおよそ次のようになる。

1 岩版・土版は形態・文様・分布・編年などの点で斉一性が認められ、両者は同一遺物として取り扱われるべきものである。

2 文様を基準として型式分類および編年を行った結果、東北地方の岩版・土版は六型式に分類され、各々は大洞B式から同A式までの土器型式に比定される。

3 また関東地方の岩版・土版は東北地方の影響をうけて発生したものであり、それらは二型式に分類されて、各々安行3b式、同3c式に比定される。

4 岩版・土版は亀ヶ岡文化によって産み出された遺物であり、その分布は北海道を除く亀ヶ岡文化圏および同文化の波及した地域にみることができ。

5 初現形態は岩版のみで占められるが、時間の経過とともに土版の割合が増加する。

6 従って、岩版・土版は土偶とは全く無関係に発生したものであり、その用途については再び検討しなおす必要がある。

7 岩版・土版の出土状態については貝塚からほとんど出土しない点に注意する必要がある。

このように、おおまかではあるが東北および関東地方の岩版・土版を分類し、その編年と分布を明らかにしたこと、またその過程においていくつかの興味深い現象を指摘したことはこの遺物の

研究を大きく進展させた。

研究史における主な業績は以上のとおりであるが、さらにその後小林達雄、横山勝栄、鷹野光行らの行った研究の中で、次のような点が検討された。

ア、岩版・土版の初現形態に関しては、天羽が示したものよりもさらに古い段階のものが存在する可能性がある(小林一九六七)。

イ、分布については亀ヶ岡文化圏という大きなとらえ方から、より小さな地域ごとに岩版・土版のあり方を検討する必要がある(横山一九八〇)。

ウ、関東地方の岩版・土版に関しては、最近大幅に進展した土器研究にあわせて、さらに細かい分類が必要である(鷹野一九七九)。

このうち、鷹野の行った研究は『土版の分類と土器型式の分類とを対比できるようにする』という目的から細分を試みたものであるが、土器文様との対比が可能な土版についてはほぼ妥当な成果が得られたといつてよい。

さて、以上のように岩版・土版の研究史をふり返ってみると、その後半の研究において中心となった作業は岩版・土版の文様と土器のそれとを比較対比することであった。実際に関東地方の岩版・土版を集成してみると、その文様は土器の文様のモチーフや描出技法と非常によく似たものが多く、これらの編年を行うのに好都合であった。

しかしながらその一方で、土器の文様としてはあまり一般的で

はないもの、すなわち鷹野自身が指摘したように『特殊な器形の土器、土偶、石剣、等にしばしば用いられる』文様をもつ岩版・土版も一定量存在する。

土器型式との対比が中心であった研究史の中で、この種の文様はほとんどかえりみられることがなかった。しかし、文様を施すことが重要な役割を果たしていたと考えられる岩版・土版に土器と、土偶および石剣・石棒類に各々特有の文様が両方ともみられることは、非常に興味深い現象といえよう。²⁾

そこで筆者はこの種の文様をもつ岩版・土版を集成・分類し、その分布のあり方や出土点数の割合を土器と類似した文様をもつ岩版・土版と比較しながら検討してみた。以下にその結果を紹介していく。

2 文様の分類

これまでに筆者が収集した関東地方の岩版・土版は二六六点である。これらはまず第一に土器の文様と類似したもの（以後本稿では第一種の岩版・土版と呼ぶ）と、土器の文様としては稀なもの（同じく第二種の岩版・土版と呼ぶ）との二者に分けることができる。

第一種の岩版・土版はこれまでに土器型式と対比することによって編年が行われており、その一部のものについては文様の展開に連続性がみられる。これらの分類は鷹野の研究に詳しいが、土版に限って分類を行ったためにとりあげられなかった文様があること、また後で第二種の岩版・土版との比較が行いやすいように

関東地方における岩版・土版の文様

との理由から、以下のようにならべておいた。

○ 第一種

A類 安行3b式から同3d式に比定される文様をもつもので、次のI~IVに分けられる。

I 正中線とイナズマ状の区画および弧線の組み合わせから成る文様である。（これらは鷹野の分類のA I類・A II類に相当する）

II 正中線とイナズマ状の区画および三叉文の組み合わせから成る文様である。（同じくA IV類に相当する）

III 列点を充填した帯状文によって正中線やイナズマ状の区画を描いたり、ある区画の中を列点で充填するものである。（同じくA V類・B I類に相当する）

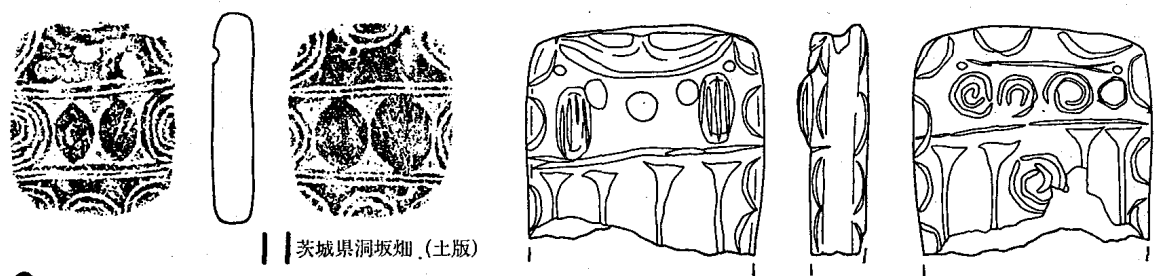
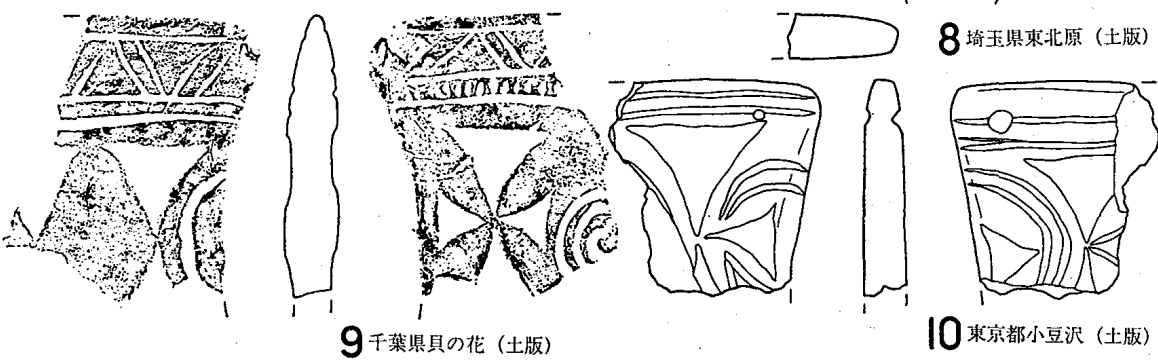
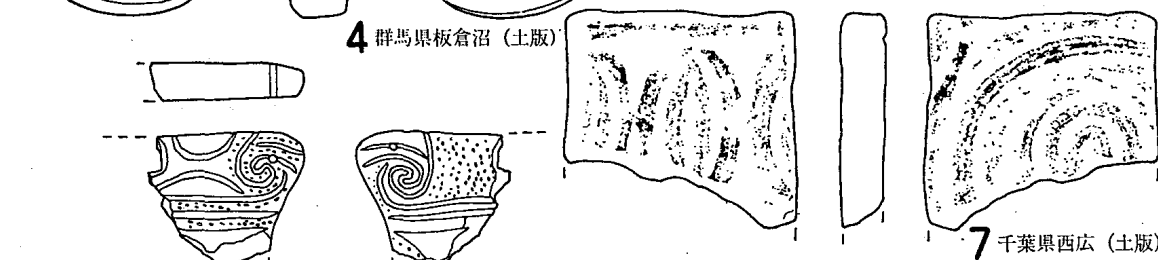
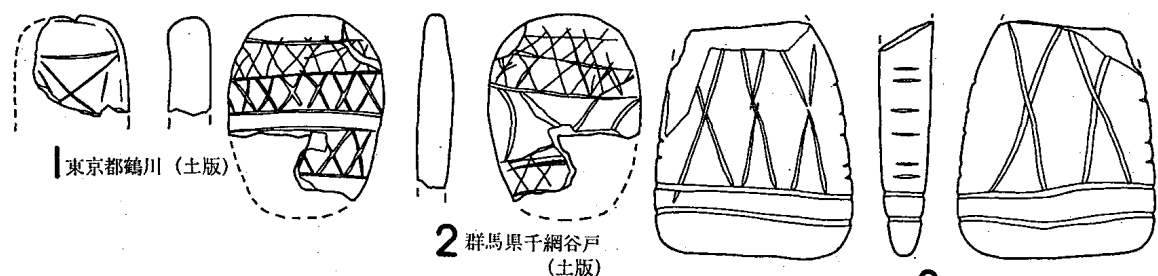
IV 列点を充填した帯状文によって正中線やイナズマ状の区画を描くもので、区画内には入組文・三叉文・三叉状入組文を配す。（同じくB V類に相当する）

B類 前浦式土器と同様の文様をもつものである。（同じくC II類に相当する）

さらに、鷹野の分類にはみられなかったが、岩版に描かれることの多い文様として次のC類を加えた。

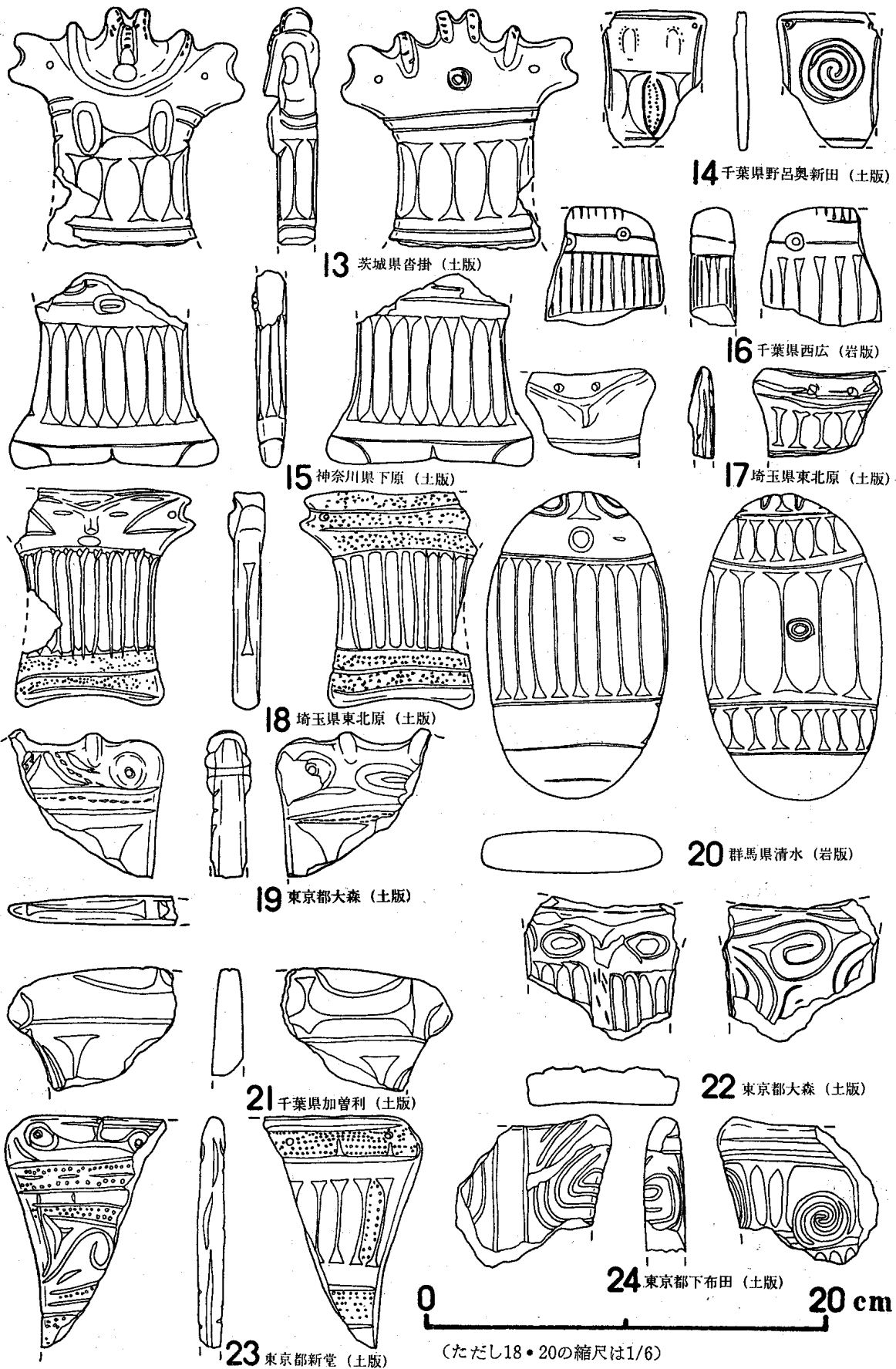
C類 浮彫的な手法によって、横位に連続する工字文と渦巻文を描くものである。現在のところ、このような文様を関東地方の土器に見出すことはできないが、筆者は東北地方における大洞C₂式土器に最も近い文様と考えている。

さて、第二種の岩版・土版であるが、これらは通常I字文と呼



0 20 cm (ただし1の縮尺は1/6)

第1図 第二種の岩版・土版実測図



第2図 第二種の岩版・土版実測図

ばれるものを始めとして、岩版・土版以外では土偶および石剣・石棒類に共通して用いられる文様をもつ。これらの文様を集成したものが第一図および第二図である。次のI、II、IIIに分類される。

○ 第二種（第一図および第二図）

I（第一図一〜三） 沈線がX字状に交差するもので（以後仮にX字状交差沈線文と呼ぶ）、全体の構成はこのX字状交差沈線文が単独に用いられるもの（一）、数個のものが横位に連続するもの（二）、またこのように横位に連続したものが数段に及ぶもの（三）などがある。

II（第一図四〜一〇） 二、三個の三角形ないしは三叉文の頂点が向かいあって一つの文様をつくるもので、三角形ないしは三叉状の区画の中を彫り凹めたものが多い（以後仮に三角形対向文と呼ぶ）。全体の構成はこのようなものを数個横位に並べたもの（五）、隙間に渦巻文を配したものの（六・七・九）、弧線を伴うもの（六〜一〇）、また刺突を加えたもの（六・七）などがある。（鷹野の分類のB III類に相当する）

III（第一図一一・一二、第二図一三〜二四） 沈線の両端が三角形に広がったI字状の文様が、数本から多い時には一〇本近くまで連続的に描かれる（以後仮にI字文と呼ぶ）。文様の構成はこのI字文を横位に並べただけのもの（一五・一六）、それが数段に及ぶもの（二〇）、また横位に並べたI字文の上下の空間に様々な組み合わせのI字文を描いたもの（二二）などがある。これにも渦巻文を配したものの（一二〜一四・二〇・二四）、弧線を伴うもの（一一・一二）、刺突を加えたもの

第1表 関東地方における岩版・土版の出土点数（ ）内は岩版を示す内数

	第一種			第二種			他	不明	計
	A	B	C	I	II	III			
茨城	32(2)	2			1	13(2)		8(1)	56(5)
栃木	6							4	10
群馬	6(4)		5(5)	2(1)	1	1(1)		6(4)	21(15)
埼玉	37				3	3	1※	30(1)	74(1)
千葉	37				3	5(1)		13	58(1)
東京	17			1	2	2	4※	8(1)	34(1)
神奈川	7				1	1		4(1)	13(1)
計	142(6)	2	5(5)	3(1)	11	25(4)	5	73(8)	266(24)
	149(11)			39(5)					

※は一方の面に第一種A、他方の面に第二種IIIを施したものの

の(一八)がある。(同じくB IV類に相当する)

これら第二種の岩版・土版は第一種のものほど綿密に編年が行われたわけではないが、鷹野の研究によりⅡが安行3c式、Ⅲが同3d式に比定され、またⅡの三角形対向文とⅢのI字文は型式的に連続する文様と考えられている。しかしながら、第一・二図に示したように、ⅡとⅢについては形態および文様構成の点で多様性が認められる。このことはⅡおよびⅢが必ずしも一型式内にとどまるものではないことを示唆するものであろう。筆者はこれらの岩版・土版がおそらくは第一種の岩版・土版と同じ安行3b式〜同3d式の期間存在したか、あるいは少なくとも晩期中葉を占めるようなものであったと考えている。

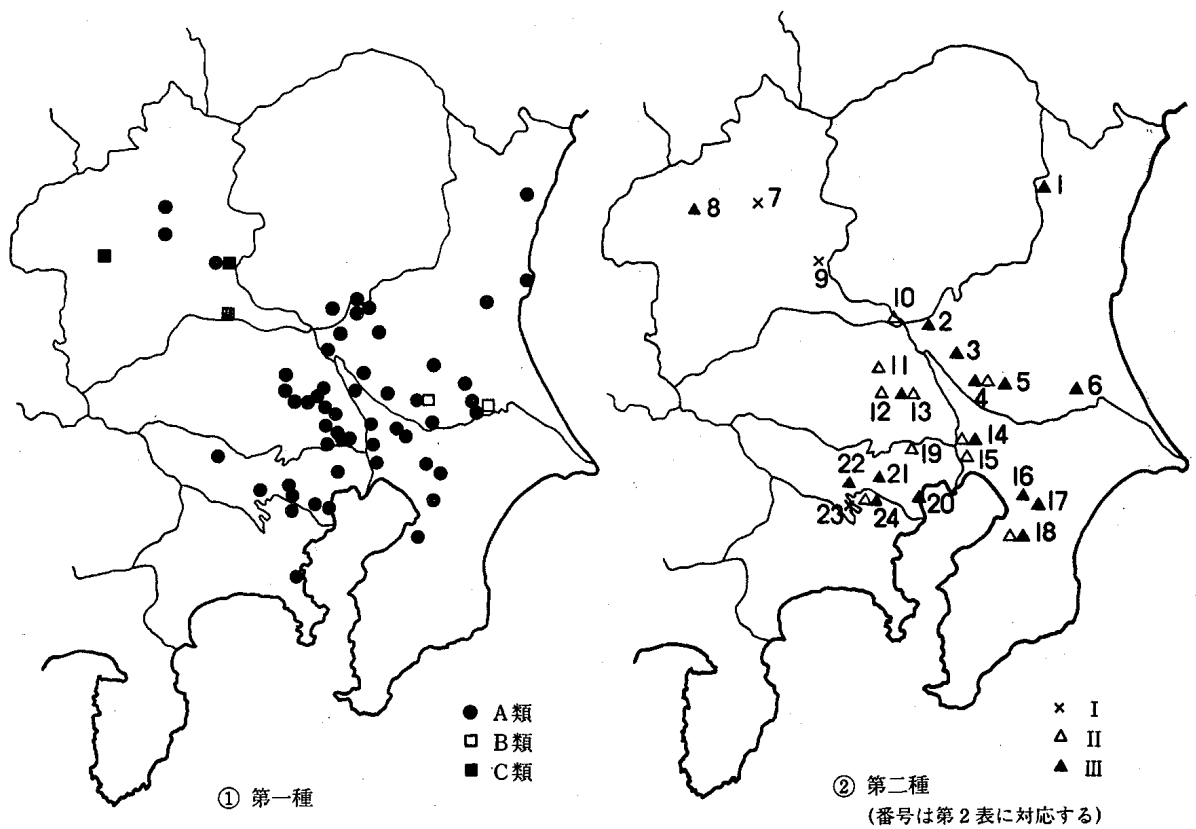
以上が関東地方における岩版・土版の分類であるが、この中には埼玉県桶川市後谷遺跡、東京都大森貝塚(第二図二二)、同多摩市新堂遺跡(二三)、同調布市下布田遺跡(二四)にみられるように、表裏のいずれか一方に第一種A類IVの文様を描き、他方に第二種Ⅲの文様を施すものが五例ある。

これら第一種A類〜C類、第二種I〜Ⅲの出土点数のうち分けは第一表に示したとおりである。

3 各文様の分布

次に先の分類に従って、各文様の分布について述べてみたい。関東地方において岩版・土版を出土する遺跡は全部で六三を数え、このうち第一種を出土する遺跡は五五、第二種の方は二四である。第三図①と②にこれらを図示しておいた。以下にこの図の

関東地方における岩版・土版の文様



第3図 関東地方における岩版・土版の分布

説明を行っていく。

○ 第一種の分布 (第三図①)

A類 関東地方の岩版・土版の中で最も広い分布をもち、遺跡数も五三を数える。各都県より出土しているが、分布の密度は奥東京湾を中心とした地域で高く、その周辺部では疎らになっている。

これは図示していないが、A類IⅡIVのうちIが関東地方の広い範囲に及んでいるのに対し、IIⅢIVの分布は奥東京湾を中心とした地域に限られていることによる。

B類 現在のところ、茨城県稲敷郡福田貝塚、同小山台貝塚の二遺跡より各一例が出土しているに過ぎない。

C類 群馬県群馬郡倉淵村一例、同桐生市千網谷戸遺跡一例、同新田郡世良田一例、同高崎市内一例、群馬県下一例と各れも群馬県から出土しており、他県では例をみない。

○ 第二種の分布 (第三図②)

I 群馬県の二遺跡と東京都の一遺跡より各一点が出土している。

II 茨城・埼玉・千葉・東京の各都県より出土しており、疎らながら奥東京湾地域に一樣に分布している。

III 栃木県を除く関東各都県より出土しているが、IIと同様に奥東京湾地域を中心に疎らに分布している。

以上が各文様ごとにみた分布のあり方である。このうち第一種A類の分布は安行式土器のそれとほぼ同様であり、同じくB類も出土例は少ないものの、前浦式土器が中心的に発達した地域から

の出土となっている。これに対して群馬県のみ分布が限られているC類は東北地方の文様要素が強く、また全て岩版によって占められるなどこの地域が関東地方の他県とは異なるものであったことを示している。

一方、第二種の岩版・土版は第一種と比べて出土点数および出土遺跡がかなり少ないが、このうちIは奥東京湾地域の周辺部に、IIおよびIIIは奥東京湾地域を中心に出土する傾向がみられる。第一種の岩版・土版とこれらの分布とを比較した場合、両者が広い範囲で重複していることは興味深い。この中には第一種と第二種の岩版・土版を両方とも出土する遺跡が一六含まれる。

4 第一種と第二種の岩版・土版の割合

前章において第一種と第二種の分布が広い範囲で重複していること、および両者を出土する遺跡が一六あることを述べた。第2表は第二種の岩版・土版を出土する遺跡をまとめたものであるが、その中の太字で示したものが第一種と第二種の両者を出土した遺跡である。これら一六の遺跡の大半が発掘調査による資料であるのに対し、第二種の岩版・土版を単独で出土する遺跡は表探資料を含む五遺跡に過ぎないことから、第二種の岩版・土版は第一種のものに伴って出土する傾向が高いと言える。

さて、一遺跡における両者の出土点数を比較すると、第一種は常に第二種を上回る点数を示している。一方、これら一六遺跡のうち第一種を五点以上出土する遺跡は一七点の貝の花貝塚を最高として七遺跡を数える。これに対して第二種は最も多く出土する

第2表 第二種の岩版・土版出土遺跡

関東地方における岩版・土版の文様

No.	遺 跡 名	第一種			第二種			不計	文 献・備 考
		A	B	C	I	II	III		
1	茨城県那珂郡 隆 郷						1	1 (江坂1960)	
2	猿島郡 二十五里寺	3					2	5 (寺門他1972)(田川他1975)	
3	猿島郡 沓 掛						2	2 (齊藤1979)	
4	筑波郡 洞坂畑	2			1	1	4	4 (水野1979)	
5	稲敷郡 小山台貝塚	3	1				4	8 (永松他1976)	
6	稲敷郡 広畑貝塚						2	2 (八幡1959)(齊藤1979)	
7	群馬県利根郡 糸 井	1			1			2 (永峯1977)	
8	吾妻郡 清 水						1 2	3 新井嘉男氏蔵	
9	桐生市 干網谷戸	4		1	1			4 (桐生市1980)	
10	邑楽郡 板倉沼						1	1 慶応義塾大学蔵	
11	埼玉県桶川市 後 谷	3*					1	4 (吉川他1979)(桶川市1979) ※うち1点は裏面に第二種Ⅲの文様をもつ	
12	大宮市 奈良瀬戸	5					1 4	10 (大宮市1969)	
13	大宮市 東北原	8					1 3 3	15 大宮市立博物館蔵	
14	千葉県松戸市 貝の花貝塚	17					1 2 1 21	21 (八幡1973)	
15	市川市 堀之内貝塚	1					1 2 4	4 (杉原他1965)(堀越1979)	
16	千葉市 加曾利南貝塚	3					1 2 6	6 (杉原1976)	
17	千葉市 野呂奥新田貝塚						1	1 (米田1968)	
18	市原市 西広貝塚	9					1 1 4	15 (上総国分寺台1977)	
19	東京都板橋区 小豆沢貝塚						1	1 東京大学蔵	
20	大森貝塚	4*					1 2 7	7 (モース1879)(大田区1980)(関1980) ※うち2点は裏面に第二種Ⅲの文様をもつ	
21	調布市 下布田	4*					1	5 (川崎1980) ※うち1点は裏面に第二種Ⅲの文様をもつ	
22	多摩市 新 堂	5*						5 (多摩市1981) ※うち1点は裏面に第二種Ⅲの文様をもつ	
23	町田市 鶴川遺跡M地点				1		1	2 (町田市1972)	
24	神奈川県川崎市 下 原	6					1 1 2	10 川崎市産業文化会館保管	

小山台貝塚・東北原遺跡でも四点と少ない。また、遺跡ごとの第一種と第二種の割合は小山台貝塚の一对一から貝の花貝塚の一七対三まで種々の値を示し、一様ではない。

このように第二種の岩版・土版は第一種のものに伴って出土する傾向があり、その場合第二種の占める割合は常に第一種と同じか、あるいはそれ以下である。

ま と め

以上、関東地方における岩版・土版の文様を分類し、各類の分布と出土点数について検討を加えた。それらの結果を再度まとめると次のようになる。

- ① 関東地方の岩版・土版を土器と類似した文様をもつもの(第一種)と、土偶および石剣・石棒類に共通した文様をもつもの(第二種)との二者に分類した。
- ② そのうち第一種の岩版・土版についてはA類I~IV(安行3b式~同3d式比定)、B類(前浦式比定)、C類(大洞C₂式比定)のようにまとめた。
- ③ また、第二種の岩版・土版についてはそれらをI~IIIに分類し、IIおよびIIIの編年を第一種と同じ安行3b式~同3d式かあるいは晩期中葉と推定した。
- ④ 第一種および第二種の岩版・土版の分布を比較した場合、第二種の分布は第一種のものよりかなり疎らとなっている。しかしながら、両者の分布は広い範囲で重複しており、いずれも奥東京湾地域を中心とする。

- ⑤ さらに、第一種と第二種の両者を出土する一六の遺跡についてみると、第二種の岩版・土版は第一種のものに伴って出土することが多く、その場合第二種の出土点数が占める割合は第一種のものと同じか、それよりも低い。

最近の研究の中で、岩版・土版の用途あるいはその具体的な使用方法について論及したものは少ない。本稿もまたその外ではないが、先の五項目を明らかにしたことによって、関東地方では第一種と第二種の岩版・土版をそれぞれ異なった目的で使い分けていたと想定することができる。また、大森貝塚の例に見られるように一つの土版の表裏に両者が施文された場合は、第一種と第二種の二つの異なった目的を一つの土版によって果たすために製作されたものであろう⁽³⁾。

また、第一種、第二種ともその文様は岩版・土版のみにとどまるものでなく、それぞれ土器、土偶、石剣・石棒類などと共通するものである。このことから、文様の共通する数種類の遺物が組み合わされて用いられた可能性も考えられる⁽⁴⁾。今後、各遺物との文様・伴出関係の比較検討を行う必要がある。

本稿の作製にあたり、鈴木公雄・外山和夫・米田耕之助・藤村東男・瓦吹堅・大塚達朗の諸氏から多くの御教示を頂いた。また、資料の収集に関しては茨城県歴史館・群馬県立博物館・大宮市立博物館・千葉市加曾利貝塚博物館・慶応義塾大学民族考古学研究室・東京大学人類学教室の各機関および新井嘉男氏のご協

力を得た。あわせて感謝の意を表する。

註

- (1) この問題に関して藤村東男はこの種の遺物に破損品および赤彩の割合の高いことを数量的に示している(藤村 一九八〇)。
- (2) 岩版・土版の中には全くの無文となるものがあるが、ごく稀な例と言ってよい。
- (3) この点に関して第二種の岩版・土版は第一種と比較して出土遺跡が限られ、点数も少数であることが注目される。
- (4) 一遺跡において第二種の岩版・土版がそれと共通する文様をもつ土器、土偶、石剣・石棒類などと共に出土した例に次のようなものがある。

茨城県筑波郡 洞坂畑遺跡 土版、石剣・石棒類(第二種Ⅱ)

および第二種Ⅲ)

埼玉県桶川市 後谷遺跡 土版、土偶(第二種Ⅲ)

同 大宮市 奈良瀬戸遺跡 土版、石剣・石棒類(第二種Ⅲ)

Ⅲ)

千葉県松戸市 貝の花貝塚 土版、土偶、石剣・石棒類(第二種Ⅲ)

Ⅲ)

同 市原市 西広貝塚 岩版、土版、土器、土偶、石剣・石棒類(第二種Ⅲ)

Ⅲ)

東京都調布市 下布田遺跡 土版、石剣・石棒類(第二種Ⅲ)

Ⅲ)

関東地方における岩版・土版の文様

同 多摩市 新堂遺跡 土版、土器、土偶(第二種Ⅲ)

文献

天羽利夫 一九六五 亀ヶ岡文化における土版・岩版の研究

(史学 第三七卷四号)

池上啓介 一九三五 土版岩版の研究(上代文化 第一〇号)

江坂輝弥 一九六〇 『土偶』(校倉書房)

大田区立郷土博物館 一九八〇 大森貝塚の土版(大田区立郷土博物館ノート 第一号)

大野延太郎 一九九七 土版と土偶ノ関係(東京人類学会雑誌 第二二卷一三一号)

同 一八九八 岩盤モ土偶ニ関係アリ(東京人類学会雑誌 第一三卷一四四号)

(東京人類学会雑誌 第一六卷一八四号)

同 一九〇一 石器時代土偶系統品と模様の変化に就いて

(東京人類学会雑誌 第一六卷一八四号)

大宮市教育委員会 一九六九 『奈良瀬戸遺跡』

桶川市 一九七九 『桶川市史 第二卷 原始古代資料編』

川崎義雄 一九八〇 『調布市下布田遺跡』(調布市教育委員会)

上総国分寺台遺跡調査団 一九七七 『西広貝塚』(早稲田大学出版部)

桐生市教育委員会 一九八〇 『千網谷戸遺跡調査報告』

小林達雄 一九六七 縄文晩期における土版・岩版の研究の前提(物質文化 第一〇号)

齊藤 忠 一九七九 『茨城県資料 考古資料編 先土器・縄文

一六九 (三三三)

時代』

杉原荘介・戸沢充則 一九六五 千葉県堀之内貝塚B地点の調査
(考古学集刊 第三卷第一号)

杉原荘介 一九七六 『加曾利南貝塚』(中央公論美術出版)

関 俊彦 一九八〇 大森貝塚出土の土版について(史誌 第一
三号)

鷹野光行 一九七七 関東地方の土版の分類について(古代文化
第二九卷第一〇号)

多摩市教育委員会 一九八一 『東京都多摩市新堂遺跡』

田川良・道沢明 一九七五 茨城県猿島郡三和町二十五里寺遺跡
の研究(奈和 第一四号)

寺門義範・他 一九七二 『土偶・土版・岩偶・岩版資料(その
一)』(常総台地研究会)

永松実・斉藤隆 一九七六 『小山台貝塚』(図書刊行会)

永峯光一・水野正好 一九七七 『日本原始美術大系 三 土偶
・埴輪』(講談社)

藤村東男 一九八〇 『九年橋遺跡第六次調査報告書』(北上市教
育委員会)

堀越正行 一九七九 堀之内貝塚出土の收藏品(昭和五三年度市
立市川博物館年報)

町田市鶴川遺跡群調査団 一九七二 『鶴川遺跡群』(雄山閣出版)

水野順敏 一九七九 『洞坂畑遺跡』(日本窯業史研究所)

モース 一八七九 『大森貝塚古物編』(矢田部良吉訳)

八幡一郎 一九五九 『世界考古学大系 日本 一』(平凡社)

同 一九七三 『貝の花貝塚』(東京教育大学文学部)

横山勝栄 一九八〇 新潟北部における土版・岩版の存在とその
意義(考古風土記 第五号)

吉川国男・田部井功 一九七九 『後谷遺跡』(後谷遺跡発掘調査
会)

米田耕之助 一九六八 千葉市野呂奥新田貝塚出土の土偶・土版
(立正考古 第二号)